

三村晃功編

摘題和歌集

上

古典文庫

三村晃功編

摘題和歌集

上

古典文庫

平成二年十一月二十日印刷発行

非売品

編者 三村晃功

上 発行者 吉田幸一

集歌和題摘

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 (九一〇) 二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

摘題和歌集
上

宮内庁書陵部藏

目次

一 凡例	三
二 摘題和歌集 上	七
春 部	七
夏 部	九
秋 部	一五
冬 部	二七
恋 部	三五

凡 例

一、類題歌集『摘題和歌集』の伝本は、『私撰集伝本書目』によれば、書陵部・高松宮・蓬左文庫・神宮文庫・河野信一記念館・九州大学細川文庫・島原図書館松平文庫などに十余本が伝存しているが、本書はそのうちの宮内庁書陵部所蔵にかかる写本三冊を底本にして、忠実に翻刻した。

二、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1、漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名等すべて底本のままとした。ただし、漢字の字体は、おおむね通行字体に従った。

2、底本の誤脱、誤字などもそのままとしたが、誤脱を補うことができる場合にのみ九州大学細川文庫本で対校し、明らかに底本の誤りと認められる場合に限り、（ママ）と傍注した。

3、底本の「みせけち」「補入」等はそのままとした。

4、便宜上上句と一句の間を一字分空白にした。

5、便宜上各歌に一連番号を付し、初句索引の検索に便ならしめた。

三、解説は、成立の問題を中心に考察して公表した『摘題和歌集』の成立（上・下）（『中世文学研究』第十二号・十三号、昭和61・8、同62・8）に、多少の補訂を施したものである。

四、初句索引は、歴史的仮名遣いによって配列した。なかに番号が二つあるのは重出歌であることを意味する。

五、本書が成るに際しては、翻刻のご許可を賜った宮内庁書陵部に、深謝申しあげる。

昭和六十四年一月六日

三 村 晃 功

摘題和哥集

春部

年内立春

御製

一 新勅 あら玉のとしもかはらてたつ春は 霞はかりそ空にしりける

前大納言為氏

二 新後 棹姫のかすみのころも冬かけて 雪けの空に春はきにけり

元日立春

慈鎮

三 としの内はかすむ山辺も見えさりき 春たつけふそ春はきにけり

師兼

四 あら玉のとしたちかへるけふしもや おなし道にと春のきぬらん

海辺立春

実朝

五 しほかまの浦の春風かすむなり 八十島かけて春やたつらん

湖上立春

雅経

六 朝日影にほてるおきのさゝなみに 春もたちぬとかはるうらかせ

故郷立春

七 朝霞続後たてるをみれはみつの江の よしのゝ宮に春はきにけり

山家立春

小侍従

八 とけぬなるかけひの水のをとつれに 春しりそむるみ山辺のさと

初春待花

後鳥羽院御製

九 雪消てけふより春をみよしのゝ 山もかすみて花をまちける

後京極

一〇 春きてもつれなき花の冬こもり 待しと思へは嶺のしら雲

定家

一一 春霞かすみそめぬる外山より やかてたちそふはなのおもかけ

関路早春

後宇多院御製

三 あふ坂のゆふつけ鳥のなくなへに あくるもまた春はきにけり

為家

三 あつまちに春やきぬらん関の戸も あくればかすむあしからのやま

阿仏

一四 関守もまたおとろかぬあふ坂の 山路夜ふかくはるやきぬらむ

定家

一五 たのみこし関の藤川春きても ふかき霞に下むせひつゝ

為定

一六 やすらはてこえける春のたよりとや 霞の関の名にもたつらむ

海辺早春

頼阿

一七 難波かた霞も浪もたえ／＼に なを春さえてうら風そふく

雪中早春

慈鎮

八 雪はふかく春はあさきや一とせに ふたゝひこもるしるしなるらん

五 ときあれはけふたつ春のかすみこそ 雪のうへにもたなひきにけり

早春柳

伏見院御哥

二〇 春の色は柳のうへに見えそめて かすむものから空そさやけき

春風春水一時来

土御門院御製

三 時わかぬ嵐も浪もいかなれは けふあら玉の春をしるらむ

春自東来

源師賢

三 後拾遺
あつまちはなこそその関もあるものを いかてか春のこえてきつらむ

師兼

三 あつまちのみちのはてよりたつ春の いかてみやこにけふはきぬらん

雪中春来

二四 雪つもる庭のかよひちあともなし いつらは春のたつなはかりに

春来鶯遅

よみ人しらす

二五 春霞続後拾たなひく空をなかめつゝ 待そくるしきうくひすのこゑ

春至氷解
師兼

二六 はるのくる跡こそ見ゆれわきてまつ とくるかたあるいけの氷に

元日宴
後法性寺入道前関白太政大臣

二七 立風雅そむる春の光と見ゆるかな ほしをつらぬる雲の上ひと

貴賤迎春
師兼

二八 なそてなくたかきいやしきをしなへて 春をむかふるやまともろひと

兼待子曰
慈鎮

二九 君かへん千代のためしと思ふより 松は久しき子曰なりけり

処々子曰
小侍従

三〇 おもふとちひくまの野へをよ所に見て ひとりねの日の松そつれなき

雪中子曰
土御門院御哥

三一 白雪続古今のきえあへぬ野への小松はら ひくてに春の色は見えけり

慈鎮

三 小松はらはなさきにけり子曰する けふこそ雪はふるへかりけれ

霞知春

左大臣

三 いつしかときのふの空にかはれるは 霞ややかて春をしるらむ

遠島朝霞

後鳥羽院御製

三 春霞たてるやいつこ朝日影 さしゆく舟をまつかうら島

慈鎮

三 はるかなりなみ路の春の明ほのに しはし霞の島かくれ行

家隆

三 奥津島かすみもまかふ浪間より また出やらぬ朝日影かな

湖上朝霞

右兵衛督基氏

三 かよふへき浪間も見えず朝ほらけ かすみにうつむ志賀の大わた

定家

三 あさはらけ見るめなきさの八重霞 えやは吹とくしかのうら風

水郷朝霞

慈鎮

三 朝またき (よと) のわたりのわたしもり かすみのそこに舟かよふなり

山家朝霞

後鳥羽院御製

四 真木の戸やつれなくあけし名残とて これよりつらき朝かすみ哉

山家夕霞

家隆

四 つくは山葉山のさとにたつけふり 霞もしけし春の夕くれ

峯帯晚霞

頓阿

四 新統古 すか原や伏見のくれのおも影に いつくの山もたつかすみかな

連峯霞

師兼

四 たちわたる霞もさそなも えい 山 みねのつゝきの見えすなりゆく

野径霞

順徳院御哥

四 風雅 夕つくひかすむ末野に行人の すけのをかさに春風そふく

野外晚霞

慈鎮

望 夕霞かた岡のへをつゝめとも なをこほるゝはうくひすのこゑ

晚霞映日

師兼

望 夕附日さすや岡辺のうすかすみ それともわかぬ春の色かな

馴島霞

同

望 かすむ日はそこも見えすみよしの きしのむかひやあはちしまやま

霞中閑居

慈鎮

望 立こむる春の霞(光の)こそ すゝのしのやのかこひ成けれ

霞繞樹

望 詠こしおきつ浪間のはまひさき 久しく見せぬ春かすみかな

霞籠水郷

後京極

吾 夕煙こゝろほそさのたちそひて さひしくかすむ塩かまのうら

霞隔遠樹

後鳥羽院御製